

TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

海南島の石干見

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-08-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 王, 易石 メールアドレス: 所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/2512

修士学位論文

海南島の石干見

2021 年度

(2022 年 3 月)

東京海洋大学大学院

海洋科学技術研究科

海運ロジスティックス専攻

王 易石

修士学位論文

海南島の石干見

2021 年度

(2022 年 3 月)

東京海洋大学大学院

海洋科学技術研究科

海運ロジスティックス専攻

王 易石

目次

1. はじめに	1
2. 石干見	3
3. 中国の石干見	9
4. 海南島の石干見	17
5. 考察	39
6. おわりに	46
7. 参考文献	49

1. はじめに

本論文は、海南島の石干見について研究である。沿岸域に生活の基盤をおいてきた人々は、数多くの漁法を工夫してきている。その一つが、石干見(いしひび)である。石干見は大型の定置漁具であり、潮間帯から海へ向かって馬蹄形や半円形、方形、あるいは直線状に岩石やサンゴ石灰岩を積み上げて、構築されるものである。魚群は、満潮時には石干見内に入り込む一方、干潮時になると干上がった石干見内に取り残されて、捕獲の対象となる。このように石干見は、潮位の変化だけを利用した単純な漁具であり、人類にとっては原初的な漁具・漁法という意見もある(辻 2021: 291)。また、一部の石干見には、高波や津波などの自然災害を防ぐ機能も認められている。かつて、石干見は世界各地にみられていたが、沿岸開発による干潟の消失や、多量の漁獲が見込める漁船による商業漁業の隆盛などにより多くが失われつつある。中国の石干見については、これまでその研究は台湾と福建省だけに集中しており、他の地域の石干見の研究は全く存在していなかった。本論文では、こうした研究の現状を踏まえ、中国の台湾あるいは福建省以外の地域にある石干見、すなわち海南島の石干見について、2021年秋に海南島で実施した現地調査にもとづき、世界初の海南島の石干見に関する

研究報告を行い、今後の海南島の石干見の保全や観光資源という脈絡で、石干見
という文化資源の保全や利用についての展望を提起するものである。

2. 石干見

石干見 (stone tidal weir) とは、非機械的陥穽具として分類される障壁漁具もしくは定置漁具の一種で、汀線から沖に向かって半円形、方形、馬蹄形、矢尻形に石を積み上げた構築物である。高潮時に石干見は海中に完全に水没する。ところが、下げ潮から低潮時にいたり、石干見はその全貌を干潟地にあらわす。その際に、石干見の中には障壁のために逃げ遅れた魚類が残留することになり、これらが傷害漁具や袋網などによって捕獲される。障壁の開口部に、笮などが設置されるという場合もある。障壁の全長は、小さな石干見では数十メートル、巨大なものになると一キロメートル以上にもおよぶ。基本的には、潮汐の潮差のみを利用して魚類を捕獲する石干見は、潮差が大きく、適当な岩石やサンゴ石灰岩が入手できる海岸線では、世界大でかなり広く観察できる通常の定置漁具である (岩淵 2017a: 229-231)。

北米大陸の先住民の間では、伝統的に石干見が広く使われてきた。極北に居住するエスキモー (スチュアート 1993)、あるいは亜寒帯から温帯にかけて分布している北西海岸インディアン (Mathews et al. 2017) は、石干見を積極的に利用してきている。南米大陸でも石干見は観察できるが、南米大陸のそれが先住民の文化要素であるのか、大航海時代以降のヨーロッパ文化の影響のもとで発生

したものであるのかは、必ずしも明確ではない (Álvarez et al. 2019)。南太平洋は、石干見の宝庫である。メラネシア (Barham 2000)、フィジー (Hornell 1950: 154; 藪内 1978: 231)、ヤップ諸島 (Jeffery 2013)、ハワイ諸島 (Nishimura 1981) などに集中的に分布している。ハワイ諸島の石干見の一部には、養魚池として利用され始めているものもある (Farber 1997)。

フィジーの石干見について、ホーネル (J. Hornell) は次のように記録している。

フィジーでは海岸地形が適当なところでは、それはどこでも一般的に見られる。それはゆるい勾配で徐々に傾斜した海岸地先で、その結果、高潮から低調位にいたる距離がかなりあることが必要である。この地先の磯もまた、もしできるならば、かなり硬い底であることが必要である。

これらの条件があるならば、フィジー人は大きな漂石を集め、それをもって低い壁の囲いをこさえるのに慣れていて、その囲いの中に潮の流れとともに沿岸にやってきた若干の魚は閉じこめられ、退潮が地先を露出したとき、囲いの中の最も低い場所の浅い水溜まりで浅いところに乗り上がったり、そうでなければ、そこに集まってしまう (Hornell 1950: 154; 藪内 1978: 231)。

狩猟採集民であるオーストラリア原住民の間でも、石干見が広く使われている (Memmott et al. 2008)。インド洋周辺では、マスカレン諸島 (藪内 1978: 360) やペルシャ湾周辺部 (Blue et al. 2013)、アフリカ南部 (Graham 1975) に石干見の分布が見られる。なお、アフリカ中部では、大西洋沿岸部でも石干見が使用されているようではあるが (Gabriel et al. 2005: 201)、その詳細は必ずしも明白ではない。大西洋沿岸域で石干見が集中的に観察できるのは、西部ヨーロッパである。スコットランド (Bathgate 1951) から大ブリテン島南部 (Cooper et al. 2017)、アイルランド (Montgomery et al. 2015)、フランス (Gandois et al. 2018)、スペイン (田和 2019: iv) というかなり広範囲に石干見の分布域が見られる。フランスの石干見については、その構築についての 11 世紀のレ島の史料が残っている (岩淵 2017a: 238)。

島嶼でありながら漁船を使用した本格的な漁業は必ずしも重要ではなく、Ré 島全体には 10 隻弱の漁船しか存在していない。他方、島民が漁労用の漁具として伝統的に使用してきたのは石干見 (l'écluse à poisons; les écluses à poisons [複数形]) である。Ré 島における石干見は 11 世紀からその存在についての記録があり、15 世紀初頭には 30 基強、

19 世紀後半の最盛期には約 140 基の石干見が使用されていた（岩淵 2002: 45）。

地球上でも東シナ海周辺部は、とりわけ石干見が集中的に分布している地域である。朝鮮半島南部（李他 2007）から九州北部（岩淵 2017b）、五島列島（水野 2007）、南西諸島（水野 2007; 矢野他 2007）、台湾北西部（田和 2007a: 15-16）、台湾海峡の澎湖諸島（李 2017）にかけて、石干見が伝統的に幅広く使用されていた。この内、九州の島原半島の石干見については、その構築についての 18 世紀の史料が（岩淵 2017b: 12）、南西諸島にある小浜島の石干見については、同島にある巨大な石干見の一つが 18 世紀に造られたらしいという資料が残っている（矢野他 2007: 99-102）。澎湖諸島における石干見の存在を示す最初の史料は、清代の 1696 年に編纂された『臺灣府志』である。

澎湖大小網泊滬四十張口共徵銀六十八兩六錢內大網一十六張每張征銀三兩五錢共徵銀五十六兩泊網二張每張征銀一兩二錢六分共徵銀二兩五錢二分大滬二口每口征銀八錢四分共徵銀一兩六錢八分小滬二十口每口征銀四錢二分共徵銀八兩四錢（高 1960: 5 卷）

澎湖諸島では、石干見は石滬あるいは滬と呼ばれている。漢字の「滬」の原意は、障壁である。この史料によれば、当時からすでに石干見での漁獲に対する課税が澎湖諸島において広く行われていたという事実がうかがえる。

ユネスコの「水中文化遺産保護条約」の第一条第一項によれば、水中文化遺産とは文化的、歴史的、または考古学的な性質を有する人類の存在のすべての痕跡であり、その一部または全部が定期的あるいは恒常的に、少なくとも 100 年間水中にあったもののことである（岩淵 2012: 11）。この定義の前半のその一部または全部が定期的あるいは恒常的に水中にあるという個所についていえば、潮間帯に設置される石干見はこの定義に完全に合致するものである。後半の少なくとも 100 年間水中にあるという個所についても、これまで見てきた通り、いくつかの石干見については、100 年以上前に構築されたという史料が残っており、石干見がユネスコの条約が定めるところの典型的な水中文化遺産であるという事実は動かしがたい。しかしながら、若干の吟味は必要である。石干見は波浪や台風などの影響により、常に修復をし続けなければならない定置漁具であり、最上部が今年になって新たに作り直された石干見の障壁であっても、その底部は 300 年前に作られたものであるという可能性も十分に有り得るのである（岩淵 2017a: 240）。

ユネスコの条約にもとづく水中文化遺産としての石干見の保護はまだ始まっ

たばかりである。中央政府レベルあるいは地方自治体レベルでの保護政策が始動しているところもあれば、保護活動が地元のレベルにとどまっているところもある。ユネスコの水中文化遺産保護条約の批准を機会に、フランスでは水中・海事考古学調査部 (Département des recherches archéologiques subaquatiques et sous-marines) が国の水中文化遺産政策の統括主体となった。しかしながら、同調査部が中央政府のレベルでフランスの石干見保護に積極的に乗り出したという形跡はない。他方、例えば、レ島においては、「レ島石干見保存会 (Association de défense des ecluses à poissons de l'île de Ré)」という地元の団体が組織され、その石干見保全の中心的な役割を担ってきている (岩淵 2017a:243-245)。その一方で、国家規模での急速な海岸線の開発により、十分な調査が行われないうままに、地元の石干見がただ破壊され、打ち捨てられていくという事例も世界各地から報告されてきている。さらに、近年の海面上昇や破壊的風雨などの海洋の気候変動の影響は、石干見にとっては最大の脅威となりつつある。基本的には潮差のみによって魚類を捕獲する石干見は、海面上昇がたった 1 メートルに達しただけで、もう使い物にはならなくなってしまうのである。

3. 中国の石干見

東シナ海の周辺部には、石干見が広範囲に分布しているが、中国の石干見についての研究はまだ始まったばかりである。中国の石干見について、田和正孝は自身の編著『石干見：最古の漁法』の中で次のように述べている。なお、この記述は、世界初の中国の石干見についての分析である。

中国の石干見に関係する文字は「滬」である。この「滬」について、まず、辞書的な記述をとりあげて、それらがもつ意味について考えてみよう。

「滬」は、『新字源』には「えり、あじろ、海辺に竹の並べて立てて魚をとる仕掛け」、『中日大辞典』には、「えり：細長屈曲した袋状に竹箆を立てて魚をとる仕掛け」となる。『漢語大詞典』によれば、唐代末の陸龜蒙による連詩作「漁具」の序文に「竹を海滸に列べる滬と曰う」こと、また宋の陸游の詩「村舎」に「潮生じ魚滬短く、風起こり鴨船斜なり」という部分があることがわかる。滬とともに簍という文字も用いられる。

『中国漁業史の研究』を著した中村（中村 1995）も、「滬」は前述し

た陸龜蒙の漁具詩の序に見えることを指摘している。さらに明の正徳修『華亭県志』卷三風俗の業漁で「竹を編んで港を断つを断と曰い」、加えて清の『全唐詩』の滬の注では「呉人これを籐という」ことも述べている。呉は現在の江蘇省の別名である。そこには太湖など長江の水流を調節する遊水湖が多く分布する水郷地帯が形成されていた(羽原 1961)。ここは当時から有名な漁業地域であった。「今」とはおそらく唐代のことをさしたのであろう。滬は日本のエリに類するものといえよう。

羽原(1961)は、中古(漢より宋にいたる年代)の漁撈法として「滬(ことえり)」をあげている。「滬」は「魴」とも書き、潮の満ちるときに海浜に竹を列をなして立て、林のようにし、これに簿(たけす)を張っておいて、退潮に伴って魚類が沖へ出るのを留めとらえるものである。したがって滬は魴と同じ仕掛けである。李・屈(1980)が著した『中國漁業史』にある挿図「魚扈図」は、時代は明らかではないが、竹と思われる杭をV字形に敷設した漁具を示している。これはこれまでみてきた定置漁具の「滬」に合致する漁具と考えてよいのではないだろうか。ただし、前述した陸游がいう「滬」は、潮の満ち引きを利用するもののようなものである。

ふたたび、『漢語大詞典』に戻ろう。

清時代、黄叔璥による『台海使槎録』の「賦餉」に「滬は海坪の潮漲の及ぶ處に於いて、周圍に土岸を築く。高さ一、二尺。缺を留め門と為す・・・・潮漲、岸を淹没すれば、魚蛤、漲に随い滬に入る。潮退けば水、滬門より出で、魚蛤、網の阻む所と為る」という記述がみられる。この滬は、沿岸に欠けた円形状（馬蹄形状）の土塁を設け、出口に網をおいたものと考えられる。土塁そのもの、ないしは土塁を中心とする仕掛け全体を滬とよんだようである。土塁であるため、石干見の石垣のように隙間から海水が出入りする構造でなかった。したがって、土塁の一部が捕魚を目的として開かれていた。構造的には、サンゴ礁地域で広く見られる、石垣の頂点部を開口しておき、そこに張網などを敷設するタイプの石干見に近い。

ところで、上海地域自体が「滬」と呼ばれる場合があることを付け加えておこう。この「滬」は「滬瀆」に由来する。「滬瀆」は本来、川の名で、吳淞江の河口付近をさした。「滬」は「扈」からきており、「扈」の本義は魚をとる道具のことである。南朝時代の、顛野王による『輿地志』に「竹を挿して海中に列べ、繩を以て之を編み、岸に向かって両翼を張る。潮上がれば即ち没し、潮落けば即ち出づ。魚、潮に随って竹に碍げられ去るを得ず、之を名づけて扈という」という記載がある。一方、

「瀆」は「独」で、その本義は単独で大海に流入する河川を意味する。

「滬瀆」の名が最初に見られるのは、梁の簡文亭の『呉郡石造銘』である。東晋年間にここに壘を築いて海賊を防いだという。これが川の名前に由来する「滬瀆壘」である（熊 1999）。

このような、中国における石干見の漁業史的記録を整理し、さらに地方誌から漁業に関する記録をひろいあげる作業が今後の課題である（田和 2007c: 288-290）。

この中国の石干見についての分析は、すべて文献からの引用であり、現地調査の結果を報告したものではない。また、それぞれの引用で論じられている漁具は、必ずしも石干見とは即断できないものが含まれている。『石干見：最古の漁法』の書評においては、当然のことながら、中国の石干見の現地調査の欠如が批判の対象となっている。

時代を遡れば、石干見の分布はさらに広域であった可能性があり、この点、まだ報告事例のない中国南部、東シナ海の東部域での状況と合わせて、今後の調査と全容の解明が待ち遠しいところである（佐野 2009：243）。

田和正孝が指摘している円弧状の土塁を築くタイプの石干見については、
例えば、清代に編纂された『澄海县志』に広東省のその記述がある。

放湖者就瀕海之地筑堤圍之設閘或謂藐辱門以時啓閉潮長則啓魚蝦之類
乘流而入或有白生長湖坪者其出恒不窮云（金 1764: 19 卷）

中国の石干見について現地調査をともなう研究が開始されたのは、2017 年以降である。2017 年に、中国大陸の石干見についての初めての研究書である『崇武明代石获』が刊行された（陈 2017）。福建省の泉州市惠安县崇武鎮の五峰村にある石干見を主として論じている。すなわち、同村の崇武半島の周辺には、現在でも石干見が残っており、現地では「石获」と呼称されている。漢字の「获」の原意は、捕獲である。残存している石干見は 1 基のみであり、その形態は単純な円弧状であり、円弧の全長は 312 メートル、石垣の高さは 0.9-1.9 メートル、石垣の幅は 2-5 メートル。海岸線から円弧の頂点までは、400 メートルである。その石垣には 3 か所の排水口があるという（陈他 2017: 31）。

この地方の石干見については、明代の 1530 年に編纂された『嘉靖惠安縣志』にその存在が認められる記述が既にある。まず、その第 5 巻において、同地方の

漁法が紹介されており、その一つとして「石扈」という文言が登場する。

凡魚得四時之氣不同各乘氣候候而至漁人隨時設技以待之日竹編網船日
旋網船日竹編鎗船日牽絲纏網日拖釣船網日沿岸撒網日撒網漁船日拖紗
纏網日方網日沿岸攀罩日拆挿竹木繁網日扞挿扈日網斗日石扈日竹箔日
扞揪小網日手罩日手搖釣船日步取凡魚大者宜晷小者宜腊賈人常裒而市
之或由海道以達於三山及延建諸郡（劉他 1982: 5 卷）

『嘉靖惠安縣志』の第 6 卷には、澎湖諸島での事例と同じく、石干見での漁獲に
対する課税の記録が記載されている。

海蕩四十二所半水門二百五十四間海地一十三所水門八間海渡四所扞滬
二十五所石滬四十一所已上每所科夏稅鈔二文秋租鈔一貫五百文秋糧正
米二斗蠔蛤埕一十三所每所夏稅秋租同上秋糧正米五斗鰲滬四所每所夏
稅秋租同上秋糧正米一斗（劉他 1982: 6 卷）

泉州市から廈門市をはさんで南側の福建省南部における石干見の調査とその
研究発表を実施したのは、これまで岩淵聡文の手によるもののみである。2018

年7月に台湾で開催された「国際石滬專家交流研討會」において岩淵は「中国大陆の石干見」を英文発表し（Iwabuchi 2018）、2022年に発表予定の「東シナ海周辺部の水中文化遺産としての石干見」と題する英文論文において（Iwabuchi 2022）、福建省南部の石干見が論じられている。以下、同論文にしたがって、福建省南部の石干見の概要を紹介する。

福建省南部の石干見は、漳浦県仏曇鎮にある井尾半島の周辺部に分布している。崇武鎮の石干見とは異なり、明代や清代の地方誌に同地域の石干見についての言及は全く存在していない。2017年の段階で、井尾半島周辺では5基の石干見のみが現役であったが、すでに長期にわたって放棄されて、使用されなくなってしまった石干見の痕跡もまだ多数残存している（Iwabuchi 2020: 22）。現役の石干見はいずれも、井尾半島先端部に集中していた。現地の福建語でも、石干見は「石滬」と呼ばれていたが、それぞれの石干見には固有名詞が付けられている。現役の石干見の内、一つは「廟墻」、一つは「土滬」、もう一つは「石辺」と命名されていた。残りの2基の石干見の固有名詞は、もうどの村落民も記憶していなかった。

5基の現役の石干見の内、もっとも保存状態が良いのは「土滬」で、形状は単純な円弧状、その石垣の全長は110メートル、石垣の高さは2-3メートルである。石垣の底部の幅は約5メートル、頂部の幅は2-3メートルである。石垣に

開口部や排水用のトンネルなどは全く作られていない。また、石垣の内側に魚を集める目的で掘られることもある、人為的な水溜まりのような部分も全く認められていない。村落民は、低潮時に石干見に入り、大型あるいは小型のさで網、さらには傷害漁具である鈎で魚介類を捕獲する。なお、低潮時は夜間であることもあり、かつてはオイルランプ、現在では電池式の電燈を夜間漁の際には持参する。

現地のインフォーマントによれば、井尾半島の石干見はかつては複数の村落民により構築されていたという。台風などで石干見が破壊された場合にも、複数の村落民が協力してその修復などにあたっていたという。一方、誰がどの石干見を使用できるのかについては、村落民間で入札が実施されていた。しかしながら、2017年の段階では、たった1人の同半島にある整美村の村落民が5基の現役の石干見内で漁労活動を行い、修復などもその当人1人で行っていた。すでにかなりの期間、石干見に関心をもつ村落民は他にはいなくなってしまったそうである。換言すれば、井尾半島の石干見はすでに、村落民の共有材ではなくなっているのである。この1名の村落民が現役を引退すれば、井尾半島から石干見漁労は完全に消滅してしまうであろう (Iwabuchi 2022)。

4. 海南島の石干見

海南島は東シナ海の南部、南シナ海の北部に位置しており、行政的には中国の海南省に所属している。海南島の陸地面積は 3.39 万平方キロメートルである。

海南島は、北東から南西にかけて大きな楕円形の雪梨のような形をしており、北東から南西にかけて長さ約 290 キロメートル、北西から南東にかけて幅 180 キロメートルで、台湾を除けば、中国でもっとも大きな島嶼となっている。島の周囲の海岸線の長さは 1528 キロメートルで、その海岸線には 68 の大小の港があり、海拔-5 メートルから-10 メートルの潮間帯は 2350.55 平方キロメートルであり、これは島の陸地面積の 6.8%に相当する。

海南島は総じて低く平坦ではあるが、中央に五指山が聳え立っており、そこからリング状の層状地形が周辺に向かって段階的に下降して、山、丘、段丘、平野を形成している。海南島の北部には広大な火山岩低丘台地があり、海を隔てて眺めることができる本土の雷州半島と同様に、新生代における火山活動がもっとも強く、もっとも頻繁に観察できた地域である。海南島は以前には、「琼州」あるいは「琼崖」と呼ばれており、略称は「琼」である。明代の 1368 年に「琼州路」は「琼州府」に改称され、行政的には広西省に属していた。明代の 1370 年には、海南は広東省に属することになった。広東省は、崖州、万州、盗州の 3 州

および 13 県から構成されており、海南島はそのうちの崖州に属するものとされた。1988 年になり、海南島は広東省から独立し、海南省が成立した。

海南島において石干見が分布している海南島の儋州市の概要は以下の通りである。儋州市は海南島の北西部に位置し、北部湾に臨み、東経 109、5 度、北緯 19、5 度に位置している。市の面積は 3265 平方キロメートルである。儋州市の地形の特徴として、東南から西北への傾斜が見られる。平均海拔は 105 メートルである。同市は、海浜平原、段地台地、山地丘陵の 3 つの部分から構成されている。儋州市の北西部では、主に玄武岩から成る第四紀海相沖積平原と河川沖積平原が観察され、同市の総面積の 28%を占めている。儋州市の中部は、段地と火山溶岩台地から構成されており、総面積の 51%を占めている。儋州市の南東部は山地丘陵から成り、総面積の 21%を占めている。ここには小山嶺が多く、そこにある儋州市でもっとも高い紗帽嶺の標高は 752 メートルである。儋州市の海岸は曲がりくねっていて、湾が多く、最大のものは儋州湾ある。儋州湾は北部湾の東にあり、洋浦湾と新英湾が含まれている。新英湾は儋州湾の内湾であり、洋浦湾は儋州湾の外湾である。同湾周辺には、大量の河川が流れ込んできており、それは豊富な有機物質とミネラルをもたらしている。そのため湾内の魚餌となるプランクトンは多く、魚類はここに集まって産卵する。1 平方海里ごとに 1 年に 25 トンの魚が生まれているという。

儋州湾周辺の石干見について、その分布する村落ごとにその詳細を記述していく。

4-1 王宅村の石干見

王宅村は、儋州市の北の洋浦干冲鎮の管轄区に所属している。儋州市の北西部に位置し、北部湾に臨み、そこには有名な天然の良港である水深の深い洋浦港がある。同村の地表には石が多く、平均海拔は11メートル、その気候は乾燥して雨が少なく、年平均降雨量は808.3ミリで、年平均気温は23.9℃である。1月の平均気温は17.3℃、7月の平均気温は28.8℃。地元の方言である儋州語によると、「冲」は海辺の砂浜や礁の間に囲まれた池を指すが、これが「石冲」となると石干見の意味となる。しかし、地元の方言では「石冲」は、「冲篱」あるいは「魚冲」とも呼ばれている。

同村の村落民は、明代に福建省南部の沿岸部から儋州市へやって来た移民の末裔であるという。『儋县志』によれば、移民たちは、ここで潮間帯に干潟が広く認められ、石干見の構築に使うことができる火山岩の礫も多く、潮差も大きい石干見漁労に有利な自然条件を発見した。以降、「石冲」での漁労で生計を立ててきたのである。ちなみに、洋浦干冲鎮という地名も、地元で多数分布していた

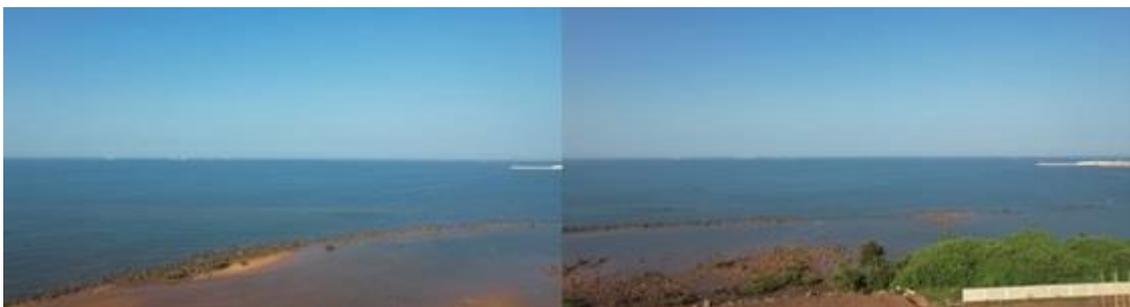
石干見に由来している（海南省儋州市地方志編纂委員會 1996：133）。洋浦干沖鎮が臨む北部湾は、かつては中国でも有名な大漁場であり、多くの専門の漁業者がそこでは商業漁業に従事していた。他方、石干見で魚を捕ることは、地元の村落民にとっての重要な生きるための生業となっていたのである。

石干見の建築工事は大規模なものであり、村落の全住民や宗族全体の人力を動員しても、完成には数年かかったという。しかし、一旦完成すれば、村落民に豊富な漁獲をもたらすのである。したがって、石干見の管理や修復作業は、家族全員にかかわる大事となったのである。昔から、石干見の管理経営、石干見で捕獲された漁獲の分配は、村落における重大事である。そのため、石干見をめぐる特殊な漁労慣行、石干見の保全についての取り決め、漁獲の分配に関する掟、石干見の管理手順などが存在していた。さらに、石干見に関連した宗教的な祭りや儀礼があり、特定の神が祀られて、特殊な信仰が形成されていた。こうした、石干見の管理、経営、相続などが、漁村社会の人間関係を維持していたようであり、これが儋州市周辺の海洋文化の重要な特徴となっていた。

また、地元の村落民によれば、石干見は、村落における民間教育を発展させるための経済の源としての役割も果たしていたという。中華人民共和国の成立初期、海南島では経済が立ち後れ、物質資源が不足していた。そのため、王宅村の子供が学校に通うのに必要であった本代や先生の生活費の大部分は、石干見で

捕獲された魚の売却益に頼っていたという。近年、しかしながら、海南省に経済特区が作られ、特に洋浦干沖鎮が海南島最初の経済特区となり、大型の経済開発区の建設が開始されたことにより、潮間帯にあった多くの石干見は埋め立てられてしまった。そして、洋浦開発区の経済発展のために多くの工場が作られ、そのための水質汚染が相対的に進んだことにより、近隣海域の魚類の種類や数量も年々減少している。これにより、石干見では、もう以前のような漁獲を見込めなくなってきた。

2021年の段階で、王宅村には4基の石沖が残っている。しかしながら、村落民がこれらを使用して漁労活動を行なうということは、ほとんど消滅してしまっている。2021年の調査の際に確認できた石干見は2基だけであった。第一の石干見は巨大なもので、その石垣の全長は800メートル以上ある(図1)。海南

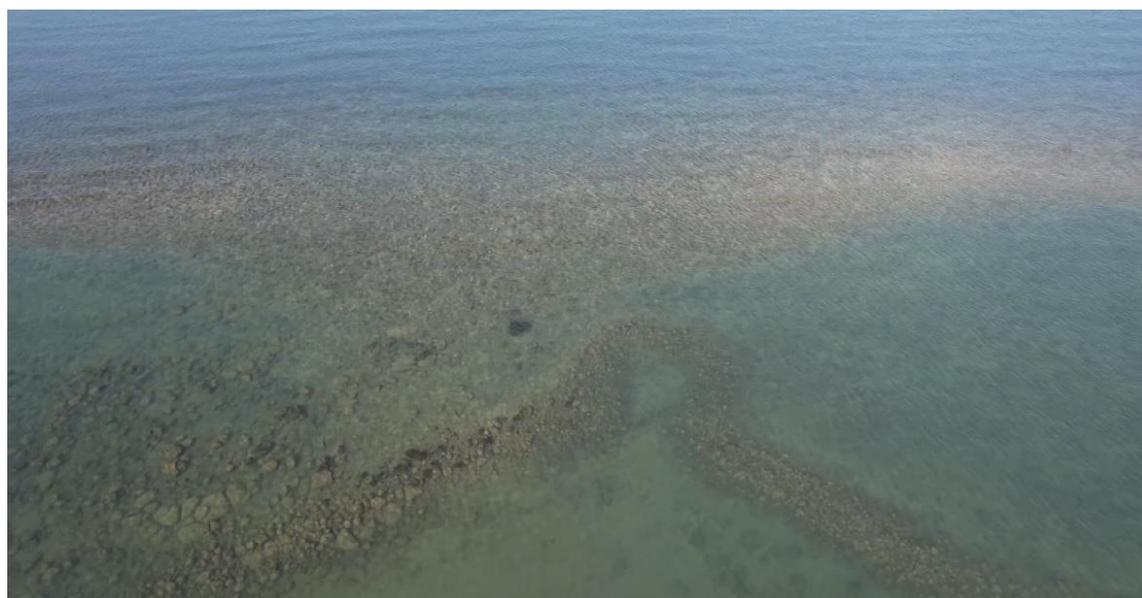


(図1 王宅村の第一の石干見)

島の石干見には、いずれも固有名詞などは存在していない。第二の石干見は小型で、その石垣の全長は200～300メートル程度である（図2）。第二の石干見の



（図2 王宅村の第二の石干見）



（図3 王宅村の第二の石干見の捕魚部）

円弧の先端には、澎湖諸島の石干見にみられるような捕魚部がある（図3）。

4-2 長沙村の石干見

長沙村は、儋州市の峨蔓鎮の管轄区に所属している。峨蔓鎮は、儋州市北部に位置し、北部湾に臨んでいる。死火山地帯の低丘陵から成り、平均海拔は70メートルである。熱帯季節風気候が観察され、年平均気温は24°C、1月平均気温は17.3°C、7月平均気温は28.8°C、年平均降雨量は900~1200 mmである。長沙村には現在、3基の石干見が残っている。そのうちの1つの小型の石干見はす



（図4 長沙村の崩壊した石干見）



(図5 長沙村の第二の石干見)

でに崩壊が進んでいるが(図4)、その西側にすぐ隣接して作られている第二の石干見は完全に保存されており(図5)、村落民は今でもこの石干見を使って漁労活動を行っている。非常に長大な石干見で、石垣の全長は約 1,000 メートル、石垣の高さは3~5メートル程である。第二の石干見は、2015年11月24日に海南省人民政府から「海南省文物保护单位」に指定され、2016年10月には「長沙村冲篱遗址」が建てられた(図6)。第三の石干見については、2021年の調査の段階では視認することができなかった。近隣の村落民も、この石干見についての情報を全く保持しておらず、風雨の影響ですでに完全に崩壊してしまったという可能性も否定できない。



(図6 長沙村冲篱遗址)

4-3 神冲村の石干見

神冲村には現在、3基の石干見が残っている。第一の石干見の石垣の一部は破壊されており、これは近隣の村落民が漁船の出入りを便利にするために意図的に行われたものである。したがって、この石干見は基本的には、台風の際の漁船



(図7 神沖村の第一の石干見)



(図8 神沖村の第二の石干見)

船の避難港となっている（図7）。第一の石干見から北東にすぐのところにある第二の石干見は保存が完璧で、その形態が完全に保持されている（図8）。現在でも、村落民により使用してされている。第三の石干見は破損しているが、まだ漁労活動をすることは可能で、低潮時には近隣の村落民がやって来る（図9）。



（図9 神沖村の第三の石干見）

神沖村の石干見は、儋州市の他の場所の石干見とは大きく異なっている。潮差を利用して魚群を石干見内部に残存させるという点では同じであるが、それぞれの石干見の石垣には2か所の開口部がある。開口部には2つの木製の閘門が設置されており、これらの閘門は退潮時の排水速度の速さを調節するために使われている。2つの閘門は、大きい閘門と小さい閘門から構成されており、排水の

需要に応じて二つの閘門を同時に開くか、そのうちの 1 つだけを開くかを選択することができる。排水の際に、閘門から魚群が石干見から逃げ出してしまうことを防ぐために、閘門の外側に漁網を設置し、逃げた魚の群れを捕獲する（図 10）。



（図 10 閘門）

また、その石垣の内側には、魚を集める目的で掘られた人為的な水溜まりのよ
うな部分、たくさんの窪みがある。満潮になる前に、村落民はこうした窪みに石
を積み上げる。満潮の際に、魚群が石干見内に入ると、多くの魚は石の隙間に隠
れたり、石の近くに集まったりする習性がある。この窪みは、漁獲効率を上げる
ためのものである。さらに、村落民は石干見内で漁労をする際に漁網を使うこと



(図 11 追い込み網)

があるという。低潮時に、石干見内の潮が完全に引かない場合である。魚によっては、音を出したり、とくに産卵の際に音を発する種類のものであり、音の方に漁網を移動させる。夜間漁の時には、村落民は漁網の浮標の上にココナツツの油を燃料とした灯火を灯す。魚群は、その光を目指して移動してきた魚群を網（図11）の中へ追い込むのである。こうした情景は「灯火の春」と呼ばれている。儋州市には「明かりの春、万金に値する」という諺もある。つまり、灯火が明るいほど、魚や甲殻類が多く漁獲できるので、「明かりが明るいほど魚が多くなる」という別の諺も存在している。

神冲村の村落民によれば、同村には先祖代々伝えられてきた石干見に関連した潮の満ち引きの法則を記した「潮の歌」があるという。書かれたものはなく、口頭伝承という形で村落民のほとんどは今でもその歌を覚えている。この歌により、村落民は大潮の満潮時を把握し、大潮が来る前に早めにより多くの人力を集結し、石干見における漁獲効率を高めていた。この「潮の歌」は以下の通りである。

大正月初七二十一、将門出虎子；二月初四与十九、蟾宫玉兔走；三月初一又十六、龙女会柳毅；四月初二十五二十九、银蛇走三周；同间切星五月十二二十五、天马行空来往独；六月初十二十三、苏武牧羊不知年；七

月初八二十二、悟空闹天河；八月初五与十九、雄鸡一唱天地久；九月初二又十六、杨戬纵天狗；十月初一十四二十七、八戒娶妻；十一月十二二十五、弥勒走失金飞鼠；十二月初九二十四、牛郎会织女

大意は、次の通りである。

1月に2回の大潮があって、それぞれ1月7日と1月21日で、しかも満潮が始まるのは午前3時から5時である。2月には2回の大潮があり、それぞれ2月4日と2月19日で、満潮開始の時間は朝5時から7時までである。3月には3月1日と3月16日の2回の大潮があり、満潮開始の時間は朝7時から9時までである。4月には3回の大潮があり、それぞれ4月2日、4月15日、4月29日で、満潮開始の時間は朝9時から11時までである。5月には2回の大潮があり、それぞれ5月12日と5月25日で、満潮開始の時間は11時から1時までである。6月には2回の大潮があり、それぞれ6月10日と6月23日で、満潮開始の時間は1時から3時までである。7月には2回の大潮があり、それぞれ7月8日と7月22日で、満潮開始の時間は午後15時から17時までである。8月には2回の大潮があり、それぞれ8月5日と8月19日で、満潮開始の時

間は午後5時から7時までである。9月には2回の大潮があり、それぞれ9月2日と9月16日で、満潮開始の時間は午後7時から9時までである。10月には3回の大潮があり、それぞれ10月1日、10月14日、10月27日で、満潮開始の時間は夜21時から23時までである。11月には2回の大潮があり、それぞれ10月12日と11月25日である。満潮開始の時間は夜21時から23時までである。11月には2回の大潮があり、それぞれ10月12日と11月25日で、満潮開始の時間は23時から午前1時までである。12月には2回の大潮があり、それぞれ12月9日と12月24日で、満潮開始の時間は午前1時から3時までである。

村落民によれば、海南島に石干見は、それを構築した宗族が私有していたが、この宗族の各支系が交代で漁獲をしたり、石干見を共同で修復したりしていたという。ある1日には、同じ支系に属する人々だけが石干見を使用することができる。石干見の使用権は1日を単位として各支系間を移動する。これ以外に、その宗族の属さない他の村落民が石干見を借用することもできる。相応の使用料を支払うことによって、その村落民は一時的に石干見の使用権を獲得する。また、一部の石干見は単一の宗族によって建てられたものではなく、いくつかの宗族により協力して建てられたものである。したがって、こうした石干見はいくつ

かの宗族の共同所有となる。しかし、使用权の移動が複数の宗族に属する各支系間となるだけで、基本的な流れに変化はない。こうした使用权の移動は、宗族内部の人間関係を維持するだけではなく、宗族と宗族との間の人間関係も維持し、同時に各宗族と村落との関係も維持することができる。また、使用权以上に重要であったのは、石干見の修復である。石干見は、台風や高波により容易に破壊されるものであり、定期的な維持管理は必須である。石干見は安定した漁獲量を村落にもたらし、村落民が生きるための富を得る手段であったため、石干見の使用权以上に、石干見の修復義務は履行されるべきものであると考えられていたのである。そのため、石干見の修復作業はその使用者が中心となり、属する宗族が修復作業を主宰した。

宗教信仰とは、ある特定の宗教を信奉する人々が信仰する神聖な対象を指す。特定の教理教義などを含む崇拜のアイデンティティによって生じた確固たる信念と全身心の帰依、このような思想信念と全身心の帰依は、特定の宗教儀式と宗教活動に貫かれ、世俗社会における自分の行為を指導し規範化するために用いられ、特殊な社会イデオロギーと文化現象に属する。明代から、海南の宗教信仰には、主に媽祖信仰、洗夫人信仰、水尾聖娘信仰の3つの信仰が併存している。その中で、水尾聖娘信仰と洗夫人信仰は海南島で生まれた信仰である。媽祖信仰は、海南島に移民してきた福建南部の人々と一緒に海南島に入ってきて、今では

海南島の主流の信仰となっている。海南島における洗夫人に対する信仰は唐代にさかのぼることができるという。明代に編纂された『正徳瓊台志』によれば、儋州寧濟廟は「唐末から廟を立てた」という（唐 2006：26 卷）。宋代になるとすでに洗夫人は海南島の保護神となり、近くの海も洗夫人の神力によって保護された区域と考えられるようになった。洗夫人を祀る廟は洗氏廟、洗太廟、寧濟廟とも呼ばれている。廟の建立時間から見ると、唐代に建てられた儋州寧濟廟は、海南島でもっとも初期に建設された洗夫人を祀る廟である。儋州寧濟廟は今でも保存されており、廟門の両側には「宁靖敬夫人贏得英名闻海島，济流来太守争教诗德播儋州」という墨書があり、洗夫人に対する崇敬の気持ちが表れている。

洗夫人を祭るために、海南島では軍坂節という祝日も設けられた。軍坂節は海南島の地元での習慣で、通常は旧暦の正月の 6 日から 2 月 20 日までの期間をいう。この期間、村落民たちは洗氏廟に赴くかあるいは、自宅や石干見の近くに祭祀台を設けて、香を焚いて洗夫人に祈りを捧げる。主に、富裕を祈願し、子孫繁殖を願い、病気を避け、厄を取り除き、家を守るためである。したがって、洗夫人信仰は、海洋文化とは関係がないようである。

漁労と密接に関係する信仰は、主に媽祖と水尾聖娘の 2 つの海洋女神に対する信仰である。媽祖は天妃、天后、天上聖母とも呼ばれ、中国沿海地区において広範囲に信奉されている海洋女神である。福建省の莆田が媽祖の発祥地であ

る。したがって、海南島における媽祖信仰は、移民がもたらしたものであることは確実である。福建省からの移民は、海南島開発の主たる担い手であった。海南島内の族譜のある姓は 103 以上と集計されているが、族譜の記載によると、名前と時代と住所が記載された福建省出身の移民の祖先は 50 余りに達したといわれている。媽祖はもともと福建人の神であり、移民はこの神聖な媽祖信仰を海南島にもたらし、海南島にたくさんの媽祖廟を建てて、敬虔な拝祭を行った。媽祖を祀った廟は「天妃宮」あるいは「天后宮」などとも呼ばれる。地理分布から見ると、海南島の媽祖廟は全島に広範囲に分布している。しかし、完全に均衡した分布が見られる訳ではない。媽祖は海洋保護神であり、海での仕事や作業、海における商業輸送ととくに密接な関係があるため、媽祖廟は臨海の沿海地帯、河口や港の近くに建てられることが多い。『儋縣志』によれば、儋州市には 4 つの天后宮があり、媽祖を祭る祝文がたくさんあって、媽祖廟の建立や再建を記録した碑文も多く残っている。毎年媽祖の生誕(旧暦 3 月 23 日)や命日(旧暦 9 月 9 日)になると、天后宮(天妃宮)で祭りが行われ、村人たちが集まって祈りの祭りが行われる(曾他 1974: 4 巻、9 巻)。

水尾聖娘は、「南天夫人」とも呼ばれる。水尾聖娘は海南島で生まれた海上保護神で、漁労民から守護神と見なされている。水尾聖娘信仰は、主に風雨の安定、出漁の平安、大量祈願と結び付けられている。清代に編纂された『咸豊文昌県志』

にも「水尾廟は、清瀾所城にある。電神を祀り、南天夫人廟と俗称する。明正徳の間に、石炉が飛来し、廟を建てたためである」と記載されている（張他 2003：3 卷）。この記述によれば、明代の正徳年間に水尾聖娘を祭る水尾廟が建立され、水尾聖娘に対する信仰も明代から始まったという。清代初頭に編まれた『廣東新語』には、漁労民が水尾聖娘を祭ることについて、次のような記述がある。すなわち「有司以端午日祭，行通獻礼，誠畏之也」（屈 2010：6 卷）。大意は、海南島の漁労民たちは端午節に祖先を祭るだけでなく、水尾聖娘も祭っている。そして、水尾聖娘に対する特別な祭祀は毎年旧暦の 10 月 15 日に行われ、村落民は焼香や紙を焼いて水尾聖娘を拝むという。

海南島の儋州市のそれぞれの石干見の近くには、祭祀の痕跡が存在している（図 12・13・14）。村落民によれば、地元の人々は洗夫人、媽祖、水尾聖娘の正式な祭祀活動に参加する他、石干見の近くに祭祀台を建てて、宗族単位での祭祀活動も行う。ところが、以上の 3 つの主要な神霊への信奉以外に、他の神霊を信奉する漁労民も多く存在している。たとえば、「感霊真君」、「霊応真君」、あるいは「感応帝君」を信奉する村落民は、祝日や婚礼日、満月の時に海に出て、石干見における豊漁などを祈願して焼香祭祀を行い、神霊の加護を祈るという。長沙村の村落民の思い出によると、幼い頃、家族と一緒に満潮時に「感霊真君」の祭祀を行い、潮が豊漁をもたらし、多くの魚や甲殻類が石干見に入ることを祈

願したという。しかし、その後の近代漁業の発展と工業地帯の現出により、石干見はすでに宗族の生業の手段ではなくなり、大部分の漁労民は工場労働者となったり、近代漁業を選択したため、今では石干見における漁獲量祈願などのためにわざわざ祭祀活動を行う村落民は少ない。



(図 12 石干見の近くの祭祀台[立像は関帝])



(図 13 石干見の近くの祭祀台)



(図 14 祖廟に隣接する祭祀台)

5. 考察

明代から 1988 年まで、海南島は長期間にわたって広東省に属していた。しかしながら、1936 年に編纂された『儋縣志』（曾他 1974）を含めて、明清代以降に編纂された広東省あるいは海南島の地方誌には、海南島の石干見についての記述は全く存在していない。したがって、海南島における石干見の位置づけについては、中国全土における一般的な沿海漁業の状況からある程度推定し、理解していく以外に方法はない。中国では明代の初期に、全国各地の水域で漁業生産を専門とする漁民を定籍し、専門の漁民戸籍の制度を導入した。漁民の戸籍は、軍家、匠戸などの戸籍と同様に、世襲の性質に属する。その管理する範囲は内陸の淡水水域も含まれ、沿海海域も含まれている。すなわち、石干見で漁労活動をしていた村落民にも特別な漁民の戸籍があり、石干見の使用にも世襲制度があったらしいと推定できる。そして、世襲の権利を持つ家族に対しては、石干見の維持、補修工事などの世襲的な義務があったことは間違いがない。

明代以降、漁民戸籍の管理を主として行っていたのは、河泊所である。河泊所とは、沿海水域または内陸河湖水域に設立された漁業に関する徴税を実施する機構であり、漁民戸籍を管理する機能も兼ね備えていた。『大明會典（萬曆朝重修本）』（申 2007: 36 卷）によると、河泊所の設置は北直隸、南直隸、浙江、

江西、湖広、福建、広東、広西、四川、雲南の計 10 の省と 62 区におよんでいる。広東省に属していた海南島にも河伯所が設置され、海南島の漁民を管理し、徴税を実施した。しかしながら、広東省における河伯所が対象としていたのは、漁船を使用する漁民だけであり、漁船を使用しない漁業活動は徴税の対象とすらならなかった。明清代には、海南島における水産業はかなりの規模となっており、当然のことながら、漁船を使わない漁業もかなり見られていた。『廣東新語』には「有以箔者，以籠者，以塗跳者，以跳白者，皆不用漁船」という記述がある（屈 2010：22 卷）。すなわち、海南島を含む広東省には漁船を使用せずに魚を獲っている漁民もたくさんいるというのである。しかし、こうした漁業は課税対象から外されていた。石干見漁労も同様である。明清代以降に編纂された広東省あるいは海南島の地方誌に海南島の石干見についての記述、とりわけ課税の記述が全く存在していない理由は、こうした史実に基づいていると考えられる。

清代に入ると、河伯所は次第に廃止しされるようになり、漁民の管理には主に里甲制度が採用された。1790 年に清の乾隆帝は勅令を布告した。すなわち、海南島の漁民の管理に里甲制度を適用、漁民全員を里甲に編入し、政府よる厳格な管理体制が確立したのである。里甲の編成体制についていえば、10 戸ごとに 1 甲が編成、糧食がもっとも多い 1 戸の戸主が甲長を務める。甲長は、自分の甲の漁船の隻数を明らかにし、漁民の戸籍も管理する。漁民の行動が厳格に管理され

るという脈絡で、漁民は漁業活動で出漁するためには、必ず許可証を申請しなければならず、許可証には、漁民の名前、出身地、年齢、漁獲日を明記しなければならなくなった。1928年に出版された『清史稿』の「選挙七」には、「凡报捐者日官生，部予以据，日执照。」という記述がある（趙 2012：112 卷）。すなわち、一般人が店舗を開いたり、貨物を販売したり、田畑を買ったり、地方で商売をしたりする場合には、それ相応の許可が必要であるということである。清代の『钦定大清会典事例』には、1655年の規定として「准民人领给执照，于沿海近处捕鱼取薪营汛官兵不许扰累」というものがあり、許可証のある人は沿海部で魚を捕ることが許され、将兵は阻止できないという意である（昆 1899：629 卷）。1684年の規定にある「豫行稟明该地方官，登记名姓，取具保结，给发印票」は、地元政府に名前を登録して、許可証を得れば、海で漁獲することが可能となるという意である（昆 1899：776 卷）。したがって、清代以降になると、石干見での漁労も許可制となったらしいが、これを裏付ける海南島の石干見に関する史料は未だに発見されていない。

海南島の石干見は、福建省や澎湖諸島における石干見と類似している。その構造は、円弧状の石垣を基本としているが、澎湖諸島の石干見の円弧の先端にみられるような捕魚部がある石干見も海南島には存在している。また、福建省の泉州市惠安县崇武鎮の五峰村にある石干見の石垣にある排水口と近似したものが、

海南島の石干見にも存在している。石干見の建造や管理配分についても、大差はないようである。石干見の建設と維持には大量の労働力の投入が必要であるという点はどこも同じであり、この側面からも所有宗族は石干見の使用権について独占性を持っていて、近代以前には、石干見はほとんど私有財産であった。すなわち、石干見の所有宗族が使用権と分配方式を決定していた。他方、福建省南部や澎湖諸島では、共同所有という形も見られていた。福建省の泉州市惠安県崇武鎮の五峰村にある石干見には交代制度が観察され、宋族の各支系が交代で石干見漁労を主宰し、漁獲は公平に分配される。海南島における漁獲の分配方式もこれに極似している。使用と分配は家族の各支系の間で交代している。以上から、福建でも台湾でも海南でも、石干見には私有性を持っていることがわかる。さらに、海南島の石干見も、福建省や澎湖諸島の石干見と同様に、売買、抵当、賃貸または贈与することができたという。これは、石干見が生産活動の源として、一定の不動産的な性質を持っていたことを示している。

このような類似点の背景には、歴史的な必然性が存在している。福建省の泉州市惠安県崇武鎮の五峰村にある石干見についてもっとも古い記録は 1530 年に残されたものであるが、澎湖諸島の石干見についての最古の史料は 1696 年のものである。明代から清代にかけて、多くの福建省の漁民が台湾に移民し、澎湖諸島や台湾本島の石干見は、福建からの移民に由来する可能性が高いと指摘され

ている。すなわち、福建省沿岸部では明代以前から沿岸漁業が比較的発展をとげてきており、石干見という漁具もかなりの規模で分布し、福建省の人々が台湾方面に移民した際に、石干見も伝播したという可能性が高い（田和 2007b: 230-231）。福建省と台湾は海を隔て相對しており、澎湖諸島はその中間にある。宋元代からすでに、福建人は台湾に移住し始め、福建文化が台湾に伝播した。明清代には、その移民がさらに増加した。

福建人の台湾への移民の状況と類似した現象が海南島でも観察できる。海南島の族譜資料によると、清代以前の海南島への移民の先祖は福建莆田の出身者がもっとも多かったという。「迁居外地的莆田人」という資料には、「琼州沿海各县，氏族多来自莆田」、あるいは「黄重官琼州知府，莅官时，其夫人自云畏航海，劝黄令娶。黄重海娶海南民家女，生儿子。今黄氏在琼为巨族，三万人丁」という記述があるという。すなわち、琼州沿海の各県では、多くの人々が莆田から移民して来た。また、福建莆田の黄氏が海南に就任に来て、海南の女と結婚し、息子を産み、今、黄氏家族は海南では大家族で、3万人ぐらいいる、という意味である（福建本地君 2021）。福建人が海南島に移民する過程において、福建省の先進的な生産方式、民間技術が海南島にもたらされ、さらには、福建省の生活習慣、方言、宗教信仰なども海南島にもたらされた。例えば、福建省晋江の謝渥が、1132年に海南島に来て、臨高知県の責任者となった。謝渥は、海南島の島民に

農業を勧め、荒地の開墾を呼びかけ、福建省の先進的な農機具である犁や鋤などを普及させた。また、島民に竜骨水車や水転筒車などの灌漑設備の製造技術と使用方法を教え、海南島の農業発展に大きく貢献した。福建人は福建省の先進的な生産技術、生産用具、思想文化、宗教信仰に影響を与えただけでなく、例えば、福建省の地名自体も海南島に移植した。海南島の行政区画図にある 527 の地名の内、87 の地名と同じものが福建省に存在している。また、海南島の方言にも、福建語の影響が強く見られる。福建省の起源の「媽祖」信仰も、現在では海南島



(図 15 養魚池に転用された石干見)

の主流信仰となっている。以上の点から、海南島における石干見文化の担い手は、元々は福建省からの移民であった蓋然性は極めて高いと考えられる。

海南島の石干見が、福建省や澎湖諸島、台湾本島の石干見と異なっている点は、石干見の養魚池への転用である（図 15）。ハワイ諸島における事例などが知られているが、これを石干見の養魚地への一般的な発展の流れの中でとらえるべきである見方も存在している（西村 1974: 257）。同様の転用は香港島でも観察されており（Iwabuchi 2022）、中国大陸における石干見の時代的な変遷を今後検討する際の重要な一事例となってくると思われる。

6. おわりに

かつて石干見は、沿岸域における漁労活動の手段一つとして利用されてきたが、さまざまな要因によって破損や破壊に直面してきた。伝統的な社会では、共同体は宗族単位での壊れた石干見の修復作業というものが一般的であったが、石干見での漁獲が少なくなるにつれて、そのような共同作業も影を潜めつつある。国家規模での急速な岸線開発は、石干見の遺棄や消滅に直結し、十分に調査されることがなく、全世界から石干見は急速に消えつつある。さらに、近年の海面上昇や破壊的な風雨などの海洋気候変動の影響は、石干見にとって最大の脅威ともなってきた。こうした現状は、海南島の石干見も同様である。他方、ユネスコの「水中文化遺産保護条約」などを受けて、石干見の保護活動も開始されている。海南省人民政府は長沙村にある石干見の一つを「海南省文物保护单位」に指定している。しかしながら、地元政府による保護活動や宣伝活動は必ずしも十分とはいえず、地元民への周知もない。他方、地元の村落民の間でも、石干見が定置漁具であるのと同時に、重要な文化財あるいは水中文化遺産であるという認識は全くなく、現存する石干見は適宜、破壊されている。

対照的に、台湾海峡にある澎湖諸島では文化遺産としての石干見の保護活動がすでに積極的に開始されている。広範囲にわたる調査活動が継続的に実施さ

れ、その成果と統計データはデータベース化されている。同時に、石干見の保全が海洋資源保護に直結するという見地から、石干見の修復活動などを後援し、それを文化観光やエコロジカル観光に紐づけしている（李 2017：63-70）。海南島においても、石干見の歴史文化価値を現実的な観光価値に転化させることが必要である。観光の発展により、石干見の維持保全を経済基盤が確立され、海洋資源の保護意識を高めることが可能となる。しかし、以下のような原則が必須である。まず第一に、石干見の利用は文化財保護の基本を遵守しなければならない。すなわち、つまり、文化財としての石干見にダメージを与えるような開発行為は許されない。第二に、ユネスコの「水中文化遺産保護条約」に基づいて、石干見そのものばかりではなく、石干見のある海辺の景観、すなわち海事文化景観あるいは海景、さらには、古い時代の石干見の考古学的な痕跡も保護の対象としなければならないのである。石干見をその周囲の環境から隔絶することはできず、石干見遺跡本体に干渉しない前提で遺跡の完全性を保証するとともに、石干見遺跡周辺の生態環境の良好性と完全性を保証しなければならない。石干見と同時に周辺生態環境を改善し、石干見が持つ歴史文化的価値を最大限に保全していく必要がある。第三に、観光という側面では、「体験」がキーワードとなる。石干見という観光資源の開発は、それを単に見学をしたり、ガイドの解説を聞くだけというレベルにとどまらず、石干見文化の内包を発掘することを通じて観光

客を石干見に溶け込ませ、観光客の参加の程度の向上をはかり、そして観光資源としての石干見の吸引力を高めなければならない。観光客は、石干見での漁労活動や石干見の修復活動に参加することにより、日常生活で得られない特殊な経験が得られる。一方、多くの観光客は、独特な体験を望んでもいるのである。第四に、観光資源として石干見を活用すると同時に、石干見保護のため、石干見の付近の海域の海洋資源も保護する必要がある。地元政府と連携して、海洋保護区域を策定し、保護区域に魚貝類の稚魚などを放流する。石干見が伝統的な漁具として再生する道が開かれるのと同時に、石干見内での漁労活動へ観光客が積極的に参加することが可能となる。このような流れの中で、海南島の石干見は、単なる伝統的な定置漁具の枠組みを超えて、文化資源あるいは観光資源として次世代に受け継がれていくべきものであるという認識が共有されていくであろうと考えられる。

7. 参考文献

岩淵聡文、2002、「フランス西部、Ré 島における石干見」、『東京商船大学学術講演会論文集』、50号：45-48。

岩淵聡文、2012、『文化遺産の眠る海：水中考古学入門』、京都：化学同人。

岩淵聡文、2017a、「水中文化遺産としての石干見」、林田憲三（編）、『水中文化遺産：海から蘇る歴史』：229-247。

岩淵聡文、2017b、「島原半島の石干見：『石干見』の再生・活用の多面的価値の発見」、田和正孝（編）、『石干見のある風景』：9-20。

海南省儋州市地方志編纂委員會（編）、1996、『儋县志』、北京：新華出版社。

金廷烈、1764、『澄海县志』、<https://www.read,nlc.cn/> (accessed on 27th January 2022)

屈大均（編）、2010、『廣東新語』、北京：中華書局。

高拱乾、1960、『臺灣府志』、台北：臺灣銀行經濟研究室。

昆岡（編）、1899、『欽定大清會典事例』、<https://ctext.org/library.pl?if=gb&res=2299&remap=gb> (accessed on 27th January 2022)

佐野静代、2009、「書評：田和正孝編『石干見：最古の漁法』」、『史林』、92（1）巻：240-244。

申時行（編）、2007、『大明會典（萬曆朝重修本）』、北京：中華書局。

スチュアート・ヘンリ、1993、「極北地帯の石干見：特殊な築に関する民族学・考古学的研究」、『史観』、128冊：64-79。

曾友文・彭元藻・王國憲、1974、『儋縣志』、台北：成文出版社。

戴熺・灿・欧阳、2003、『万历琼州府志』、海口市：海南出版社。

田和正孝、2007a、「石干見の分布」、田和正孝（編）、『石干見：最古の漁法』：1-35。

田和正孝、2007b、「澎湖諸島における石干見漁業史」、田和正孝（編）、『石干見：最古の漁法』：227-260。

田和正孝、2007c、「東アジアの石干見研究：まとめと展望」、田和正孝（編）、『石干見：最古の漁法』：285-296。

田和正孝、2019、『石干見の文化誌：遺産化する伝統漁法』、京都：昭和堂。

田和正孝（編）、2007、『石干見：最古の漁法』、東京：法政大学出版局。

田和正孝（編）、2017、『石干見のある風景』、西宮：関西大学出版会。

趙爾巽（編）、2012、『清史稿』、天津：天津古籍出版社。

张霈等・林燕典・顔艳紅・頼青寿、2003、『咸豊文昌県志』、海口市：海南出版社。

陈金良・李明儒、2017、「崇武峰后明代石获（汙）之初探」、陈金良（編）、『崇

武明代石荻』：30-50。

陈金良（編）、2017、『崇武明代石荻』、泉州：惠安县重华文史委員会・崇武镇五峰村村民委員会。

陳憲明、2007、「澎湖諸島における石滬の研究」、田和正孝（編）、『石干見：最古の漁法』：191-225。

辻貴志、2021、「書評：田和正孝『石干見の文化誌：遺産化する伝統漁法』」、『年報人類学研究』、12号：291-295。

唐胄纂、2006、『正徳琼台志』、海口市：海南出版社。

中村治兵衛、1995、『中国漁業史の研究』、東京：刀水書房。

西村朝日太郎、1974、『海洋民族学：陸の文化から海の文化へ』、東京：NHKブックス。

羽原又吉、1961、『中國漁業の沿革』、「社会経済史学」、26（4・5）卷：216-230。

林田憲三（編）、2017、『水中文化遺産：海から蘇る歴史』、東京：勉誠出版。

福建本地君、2021、「福建历史：为何福建人会移民海南岛，海南人说的是闽南语吗？」、<https://xw.qq.com/partner/vivoscreen/20210425A0C136/20210425A0C13600?vivoRcdMark=1> (accessed on 27th January 2022)

水野紀一、2007、「奄美諸島および五島列島の石干見漁撈」、田和正孝（編）、

『石干見：最古の漁法』：115-150。

矢野敬生・中村敬、2007、「沖縄・小浜島の石干見」、田和正孝（編）、『石干

見：最古の漁法』：55-114。

藪内芳彦（編著）、1978、『漁撈文化人類学の基礎的文献資料とその補説的研究』、東京：風間書房。

熊日之（編）、1999、『上海通史』、第1巻、上海：上海人民出版社。

李士豪・屈若攀、1980、『中國漁業史』、台北：臺灣商務印書館。

李相高・許成会、1980、『中國漁業史』、台北：臺灣商務印書館。

李相高・許成会、2007、「韓国の石干見漁業」、田和正孝（編）、『石干見：最

古の漁法』：151-190。

李明儒、2017、「澎湖石沪的研究調査与历史变迁」、陈金良（編）、『崇武明代

石获』：51-72。

劉天授・張岳、1982、『嘉靖惠安縣志』、上海：上海古籍書店。

Álvarez, R., Munita, D., Mera, R., Chilena, S., Borlando, Í, Ther-Ríos, F., Lagos,

L., Núñez, D., Hidalgo, C., and Hayward, P., 2019, 'Rebounding from

Extractivism: The History and Re-Assertion of Traditional Weir-

fishing Practices in the Interior Sea of Chiloé', *Shima*, vol. 13: 155-173.

Barham, A. J., 2000, 'Late Holocene Maritime Societies in the Torres Strait

- Islands, Northern Australia', In O'Connor, S. and Veth, P. (eds.), *East of Wallace's Line*, Rotterdam: Balkema Publishers: 223-314.
- Bathgate, T., 1951, 'Ancient Fish-Traps or Yairs in Scotland', *Proceedings of the Society of Antiquaries of Scotland*, vol. 83: 98-102.
- Blue, L., Strutt, K. D., Sheehan, P., and Jackson, P., 2013, 'Developing an Integrated Policy for Maritime and Coastal Heritage of the UAE: A Collaborative Approach', *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies*, vol. 43: 63-76.
- Cooper, J. P., Caira, G., Opdebeeck, J., Papadopoulou, C., and Tsiairis, V., 2017, 'A Saxon Fish Weir and Undated Fish Trap Frames Near Ashlett Creek, Hampshire, UK: Static Structures on a Dynamic Foreshore', *Journal of Maritime Archaeology*, vol. 12: 33-69.
- Farber, J., 1997, *Ancient Hawaiian Fishponds*, Encinitas: Neptune House Publications.
- Gabriel O., Lange K., Dahm E., and Wendt T., eds., 2005, *Von Brandt's Fish Catching Methods of the World*, 4th ed., Oxford: Blackwell.
- Gandois H., Stéphan P., Cuisnier D., Hulot O., Ehrhold A., Paul M., Le Dantec N., Franzetti M., 2018, 'The Stone Tidal Fish Weirs of the Molène

- Archipelago, Iroise Sea, Brittany, Western France: A Long-term Tradition with Early Megalithic Origins', *The International Journal of Nautical Archaeology*, vol. 47: 5-27.
- Graham, A., 1975, 'Discussion on the Age and Use of Tidal Fish-Traps (Visvywers)', *The South African Archaeological Bulletin*, 30: 105-113.
- Hornell, J., 1950, *Fishing in Many Waters*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Iwabuchi, A., 2018, 'Stone Tidal Weirs in Mainland China', In BOCH (Ministry of Culture), (ed.), *Proceedings of the 2018 International Seminar on Stone Fish Weirs*, Taichung: BOCH.
- Iwabuchi, A., 2020, 'Risk and Problems Relating to Protecting and Researching Underwater Cultural Heritage in East and Southeast Asia', In Hafner A., Oniz, H., and Underwood, C. (eds), *Heritage under Water at Risk: Threats, Challenges, Solutions*. ICOMOS-ICUCH, Paris: 22-25.
- Iwabuchi, A., 2022, 'The Underwater Cultural Heritage of Stone Tidal Weirs around the East China Sea', In Liu, Y., Ward, S., and Walker-Vadillo, V., (eds.), *The Materiality of Sino-Foreign Maritime Cultural Exchange*, Dalian: Dalian Maritime University Press (forthcoming).

- Jeffery, B., 2013, 'Reviving Community Spirit: Furthering the Sustainable, Historical and Economic Role of Fish Weirs and Traps', *Journal of Maritime Archaeology*, vol. 8: 29-57.
- Mathews, D. L. and Turner, N. J., 2017, 'Ocean Cultures: Northwest Coast Ecosystems and Indigenous Management Systems', In Levin, P. S. and Poe, M. R., (eds.), *Conservation for the Anthropocene Ocean: Interdisciplinary Science in Support of Nature and People*, Cambridge: Academic Press: 169-206.
- Memmott, P., Robins, R., and Errol, S., 2008 'What Exactly Is a Fish Trap? Methodological Issues for the Study of Aboriginal Intertidal Rock Wall Fish Traps, Wellesley Islands Region, Gulf of Carpentaria, Australia', In Conolly, J. and Campbell, M. (eds.), *Comparative Island Archaeologies*, Oxford: Archaeopress: 47-67.
- Montgomery, P., Forsythe, W., and Breen, C., 2015, 'Intertidal Fish Traps from Ireland: Some Recent Discoveries in Lough Swilly, Co. Donegal', *Journal of Maritime Archaeology*, vol. 10: 117-139.
- Nishimura A., 1981, 'Maritime Counterpart to Megalithic Culture on Land', *Journal de la Société des Océanistes*, vol. 37: 255-266.